
梅園さん家のたまきとまどか

サユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅園さん家のたまきとまどか

【NZコード】

NZ86277Z

【作者名】

サコ

【あらすじ】

梅園さんの家の姉妹は今日も元気です。元気担当物知りお姉さん・環^{たまき}と、料理が趣味のおつとりとした妹・円^{まどか}、一人は美人姉妹と近所で評判です。昔から円はお姉ちゃんが大好きです。環も妹が大好きです。でも、一人の気持ちはちょっとだけ違うようです。姉妹は私立菖蒲ヶ丘女子高等学校に入学します。そこで出会った友人と一緒に過ごす日常は毎日が遠足以上。毎日がどきどき、わくわく、ふわふわでいっぱい。みんなと一緒に、ゆるやかな坂を一踏みずつ歩いて行くように、今日も姉妹は成長中です。 四コマ風。 42文

字×36行の見開き（よくオーバーしますが一枚分におさめます）
ごとにお話が進んでゆきます。 ふわふわしながら連載開始です。
楽しいお話をめざしてがんばります！！

評価・感想・ご意見、要望あつましたら、 いただけるのであれば、
この上ない喜びです。

せじめ (前書き)

はじめに。を追加しました。設定など紹介いたします。

はじめに

はじめに

この物語はファイクションです。登場するすべてが作者の妄想でできています。

内容は、「遅れてきた百合田常シヨー・ストーリー集」です。日本の北の方にある私立菖蒲ヶ丘女子高等学校（あやめ高）に進学した梅園環、梅園円姉妹と、その友人達がゆるゆる日常を送るお話です。ちょっとだけ百合です。でも、このお話のメインは妹円の重箱お弁当の中身です。作者は心から楽しんで書いていますので、よろしければおつきあいください。

登場人物

梅園円

双子のうち、妹担当。誕生日は6月12日。本編語り部。のほほん担当。しつかり者（？）の姉の元で育つたせいか、ちょっと常識からはずれた考察力の持ち主。的には外すためにある女の子。料理が得意でお弁当を含めた三食すべてを担当している。そしてなによりお姉ちゃんが大好き。とにかくお姉ちゃんが大好き。お姉ちゃんがいれば幸せです。ほくろの位置は口もと右下。

梅園環

双子のうち、姉担当。誕生日は6月11日。物語の牽引役。愛称はたまき。しつかり者だけれどおおぞりっぽでいい加減などころもある。けれど、快活に笑い時に一緒に悩むことのできるよき姉。妹を何よりもいちばんに大切にしている。妹が困ると必殺技「お姉ちゃんパ

「ワーッ」を発動する。ピッキングとかしちやつ。普段は家事から何まで妹任せ。勉強はできる。もちろん姉妹そろって容姿はまるで一緒。見分け方としてほくろの位置が妹と逆。口もと左下。

鶴来冴子
つるきわさえ

梅園姉妹のクラスメイト。誕生日は3月3日。ツツコミ担当。愛称はさえこ、やえぴょん。スレンダー美人。堂々たるメリハリのある高身長ボディと、ふわゆるの長髪に切れ長の目はまさに大和撫子。冷静な立ち回りで的確にスマートにツツコミを入れる。が、ツツコミを入れられる間柄になるまでは「アタシの右腕鎮まれ」など危ない発言がある。手がエメラルド色に発光こともあるらしい。けれど、もともと背も低く内気な少女だったらしい……。それを知っているのは今となつては幼馴染みだけである。入学式で円と友達になる。彼女のポテンシャルはまだまだこれから引き出されでしよう。

道音新菜
みちおとにいな

梅園姉妹のクラスメイト。誕生日は4月9日。搔き乱し担当。愛称は二ーナ、ブラジルさん、極小などなど。金髪ツインテールのちびつ子。どうやらスウホーテン人の血が四分の一入っているようです。身体測定の公式記録によると142cmらしいが本人は150cmと公言している『保健室の先生談』。冴子と幼馴染みで、冴子が心配で同じ高校に進学するほど冴子ラブ。けれどいつも想いは空回り気味。「～なのですわ」など、お嬢様っぽい口調だが、その通り、父親は国際線のある航空会社の社長。いつも冴子に邪険にされるが、冴子の罵倒を受け流す機能が脳のどこにあるらしく、まったくへこたれない。憎めないやつ。

九条尋緒
くじょうひなね

no date . . . 三話くらいで登場する新キャラを用意してま

す。姉妹のライバルになるかも……！

舞台

あやめの市

日本の北国のどこにあるらしい。梅園姉妹の住んでいる街。

私立菖蒲ヶ丘女子高等学校

あやめの市にある進学高。施設の充実度は全国トップクラスを誇る。『未来を創る女性』『文武両道』を学校の精神として掲げ、学業の他に部活動にも力を入れている。新校舎（本堂）に加え、第一第二体育館、格技場、室内プール、野球場、トラック付きサッカーグラウンド、体育用グラウンド、トレーニングルーム、旧校舎（部室棟）寮などがある。生徒数は1500名ほど。300名ほどが寮生活を送っている。校則はとても厳しいことで有名。梅園姉妹達は旧校舎の今は使っていない家庭科室で放課後によく駄弁っている。

梅園ちひるのたまおひめじか

私の名前は梅園まどか。

お姉ちゃんの妹をやつています。

私の朝は早い。

お姉ちゃんよりも、ずっと早くに起床する。パジャマ姿から制服に着替え、エプロンをひつかけて、私はキッチンに立つた。

「今日は雲一つない快晴だ」

小窓から澄んだ空が覗いている。

「ん~、一度寝したら気持ちいいだらうなあ」

そんなことを呟いてはみたものの、ダメダメ、やるいじとこつぱいなのです。

私はお姉ちゃんのためにお弁当を作らなければいけないのです。ついでに、あくまでつこでなんだけど、自分のもね。

日付は四月一日。

今日は高校の入学式。

私が得意とするお弁当作りで張り切らないわけがない。

こんな気持ちのこい日は公園でお弁当を広げると、美味しいんだよなあ。

「……入学式も大きな公園でやればいいのに」

そしたら、青空の下で私の作ったお弁当を頬張るお姉ちゃんを眺められるのに。

んー……、お姉ちゃんはもう高校生なのだし、かよひとどきやつにないか。

「……いえ、高校つて遠足あるの？」

「……あ、みつけた」

私は食器棚の奥に重箱をみつけた。

それをひっぱりだして、にやけてみる。

お姉ちゃんの好物は、アスパラベーコン炒め。

ベーコンはちょっとだけ焦がしたもののがいいんだって。

噛みしめるとじゅわっと味がしみ出るらしいよ。

私は、だから、火力強めで一気に炒めることにした。お姉ちゃんの好みの通りに。

私はお姉ちゃんの事でわからないことはないよ。お姉ちゃんの方が物知りなんだけどね。

「ん、いい匂い。お姉ちゃん、喜んでくれるかなあ」

よし、高校生活を始めるにふさわしいお弁当を作るぞー。でも、高校つてどういうところなんだろう。

バナナはおやつに含まれちゃう校則とか、あるのかな。

お姉ちゃんは知っているかな。

あとで聞いてみよう。

チクタクチクタク。時計の音がちょっとびり大きい。

午前六時のキッチンはちょっと寂しい。

お姉ちゃん、早く起きてこないかな。

お姉ちゃんの名前は梅園たまき。

私と会わせて田環になります。んんと、田環姉妹とか、小学生の頃は言われてたなあ。

名前、
好き

午前七時。

私は二階に上がり、お姉ちゃんの部屋の扉をノックした。そろ起こさないと、遅刻してしまう。部屋を覗くと、お姉ちゃんはまだ寝ているみたいで。

おねーちゃん

私はやいどくジエに声をかける
「……………」でも、返事はなかつた。

……あれ？ あれあれ？ 巨大てるてる坊主が現れたよ。大きさ
は私と同じくらい。

な。

「おじか、それは今田の記念すべき入学式との口を快晴にするための、かりんとうの袋に入っていた乾燥剤をふんだんに詰めた、たまき特性てるてる抱き枕だ！ どうだこの快晴つぱり！ つりやあ… おはよおじまじかー、うつやうつやうつやうつやう…」

背後からお姉ちゃんがエイカウンントしてきたよー！ ビーから現れ

朝からもみくひやこねたひるよ……。ああ、でも、お姉ちゃん

は私の好きなところを知っているから、なんだか手足が痺れてきた。

「おねえちゃん……ん……」体に力が入らないや。

頭を撫でられるのは、気持ちが良いよね。

「これが忍法変わり身の術だ。まだまだ隙だらけだな。はつはつは

「忍法使われたら、勝てないよお

振り返ると、姿見で映し出されたような私の分身が高校の制服を

着ている。

くくりくじした大きな瞳に、さらさらの髪の毛。やつぱりこつども

お姉ちゃんはかわいいな。

「ううう、姉妹と言つても、私たちは双子なんだよね。違うのはほぐりの位置だけだよ。

私は脣の右下に。お姉ちゃんは脣の左下に。だから鏡合わせ。鏡映文字のようだつてお姉ちゃんは言つていたよ。

「あれ、まだか、なんで中学の制服着てるんだ?」

「おう?」どういふことでしょう?

「さては寝ぼけてるな。昨日『同じ高校に行けるんだよね!』? 本当にお姉ちゃんと一緒に!?』とか興奮しすぎて寝れなかつたか?『あ、そつか。私も今日が高校の入学式だつたんだ。でも、寝ぼけてないよ!』

ん~、でもどうして間違つたんだろう?

頭をくしゃくしゃされて、少しだけ恥ずかしい気持ちになつた。

「お姉ちゃん、高校つてどんなところかな? 遠足にバナナ持つて行つてもいいのかな?」

「まどか、高校はな、遠足よりも楽しいことがいっぱい待つてゐるぞ! バナナだけでなく、かりんどうだつて持つて行つてもいいんだ! だから毎日が遠足だ。いや、毎日が遠足以上だ! 覚悟しつけ

ビシイツとお姉ちゃんは決めポーズ。

なんだか、私、ワクワクしてきた。そつか、私も高校生になつたんだよね!

入学式とお弁当と空き教室

校舎前の掲示板で私は驚いていた。

まさか、こんなことが起るなんて、夢にも思っていなかつたら。お姉ちゃんは言つた。

そのまさかだよ。

「……しかし、話題作りの一環なんだろつな。家が同じなら情報の発信源を一つにまとめることができるし何より色々と教師側の手間が省ける。二人で一つ扱いか……、図られたな」

そう、私とお姉ちゃんは同じクラスになれるようです。

ほら、ちゃんと見て。指さして。はいチーズ。

パシヤ。

というわけで、私は浮かれています。写メ撮つちゃつた。

お弁当を抱えながらだつたから苦労したよ。でも、お姉ちゃんの大事なお弁当だから一緒に写りました。あ、まだ中身は秘密なんだ。なので、お姉ちゃんがどうして怪訝な顔をしているのか、わからぬ。

「もしかして、イヤ?」

「そんなわけないじゃないか。ウチは姉として、まどかから田を離さなくて済むから一安心だ」

つうふんと、つまりそれは、『お姉ちゃんはまどかから一瞬たりとも田を離したくない田を離したら死ぬ。いやむしろ死ぬ』って事だよね。嬉しいけど、まだ朝だし、玄関先だよ? 気が早いなあお姉ちゃんは。

校舎に入ると、初めて嗅ぐ匂いがした。これが 高校。

ていうか、女子校! 右も左も女の子だらけ! 桃源郷つていうか、百合源郷?

すんばらしい。

だめだめ、私にはお姉ちゃんがいるのです。浮気、ダメ、絶対。

「にしても校舎に入る前にこの学校の体质に一石投じたくなつたぜ」

「なんで？」

新品の靴をあわせながら、一年生の階を田指す。……
といつても半歩先を行くお姉ちゃんの後について行つてゐるだけ。さ
つき、何年何組か見忘れちゃつた。あ、一年なのは間違いないよね。
「めんべくせがりがあつたからだ。双子を一括りにするとか、怠
惰だら」

「ううかなあ。私は嬉しいよ」

むつかしい言葉を使われたので、率直に感想だけ。
お姉ちゃんは、やつぱり物知りだ。

「ウチも嬉しいぞ。だがな、きっと面倒なことになる。そもそも、
それも予定調和か」

ガラガラと教室の扉をお姉ちゃんは開ける。

あ、そういえばここ何組なんだろ？ つまり私は何組？

私は上を向きプレートを確認する。四組だそうです。

と、教室がどよめいた。私は上を見たままよろめいた。お姉ちゃんにぐいっと引き戻される。

「……双子だ！」明るい声。教室には半分くらい生徒が集まつて
た。みんなの視線が一いつひに集中している。そつか、珍しいんだつ
け。

「……ああ、めんべくせえ。コレだよコレ」お姉ちゃんが私を置
いて先に教室に這入る。

「待つて待つて！」

私も慌ててその後ろに付いていく。

なんかお姉ちゃん、機嫌悪いなあ。なんとなくわかるんだよね。
確かに私も、お姉ちゃんの事を興味津々に見るクラスメイトが、
お姉ちゃんに恋をしてしまわないか、本気で心配です。

お姉ちゃんのかわいさは、珍しいからね！

どうしよう、お姉ちゃんを巡るライバルが、いきなり増えちゃつ
たかもしれません。

ライバル……多すぎるとよ……。

校歌斉唱は歌えませんでした。

作詞者の名前が特に難しかったよ。龍ヶ嶺そ、そー……、なんて
読むの？

そんな風にプリントとこらねーじしてたら、みんな座つててびつ
くりしたよ。

いつ終わったの？ お姉ちゃんも教えてくれればいいのに。つて、
今は私の前に座つてているんだつた。……首だけぐるつといいち向か
ないかな。

ところで、他のクラスの子かな？ 歌つてたんだけど、いつ練習
したの？

不思議だなあ。

にしても入学式は眠たいなあ。

校長先生の話が長いよ。眠いよ。睡眠導入剤つてやつだよ。ほら、
不眠症になつたアイドルがよく飲むやつ。え？ そんなのない？
お姉ちゃんに聞きたいけど、聞けないしなあ。

それより。

びつくりしたことがあつたよ。

誰かに聞いて欲しいよ。

でもお姉ちゃんに話しかけたら、先生方に印象悪いよね。
お姉ちゃんの印象が悪くなつちゃうことはしてはいけない。我慢

……でもつ、

「あ、あの。どうして校長先生、男、なんでしようか、ね？」

訊いちゃつた！ 隣の子に訊いちゃつた。

悪いことしている私、現在かつこいいかもしません。

ドキドキして、隣を向くことができないから、ちゃんと聞こえて
いるかな？

不安だけど、どうしよう、横向けないよ。

「ぶつ」

あれ？ なんか吹き出されちゃった。

と思つたら、くすくすと周りが笑い始めたよ。

あれ？ お姉ちゃんまで肩が震えてる……！

「ねえ、本氣で言つてんのアンタ。何ソレ、もう笑わせないでよ」隣の子に小声で返されて、ついでに脇腹を突かれた。その子はまた「くくっ」と笑い始めた。

私はぎりぎりと口ボソトみたいに首を曲げて「どうして？」と小声で返す。

「うちの担任も男でしょ？が。女子校でも男の先生くらいくるわよ」そういえば、初老のおじいちゃん先生でした。

「ハートキヤツチ、ばつちりね」

ワインクされちゃつた。映画以外で初めて見たよ。

その子は大人っぽい人でした。切れ長の目で、なんだか諭されてるみたい。

ほわわっとウェーブのかかった髪の毛は、毎朝コテでセットしてるのかな？

「そ、そりゃんだ。物知りだね」

お姉ちゃんとどつちが物知りかな？

「アンタ、それ狙つてるの？ …… いえ、『じめんなさい』。やつこいつ感じはなさそうね」

「どういう感じ？」

「どうもいひもないわよ。…… アタシの名前は鶴来冴子^{つるぎわかなこ}。よろしくね」

鶴来さんは、田であなたの名前は？ と訊いてくる。でもどうしてわかつたんだろう？

「あ、ええつと、前に座つているのがお姉ちゃんのたまきです」

「じゃなくてあなたの名前」

「はうん」まだ紹介途中なのに。いつもそりなんだけど、私はお姉ちゃんを紹介してからじやないと、自分の事を話せないんだよ。

私は息継ぎをして。

「まどかです」

「双子なのね。でも同じクラスになるなんて、そんなこともあるのね」

お姉ちゃんと同じ事を言つんだ。そんなに珍しいのかな?

「……無礼かもしれないけど、あなたたち見分け方とかあるの?」

「あ、よく聞かれますから、大丈夫ですよ。私たちは簡単です。美人な方がお姉ちゃん」

相違ない。お姉ちゃんは誰よりも美人でかっこいいんだから。

「……あの、アタシには……、『めんなさい、似すぎてわからな』いわ」

「双子素人だからですよ、きっと」

お姉ちゃんの魅力に気がつかないなんて。お姉ちゃんを早く紹介したいなあ。

「あなた、まどかちゃんだつけ。面白いのね、とても
ん? そんな面白いこと言つたかな? そういうえばせつとも笑わ
れちゃつたつけ。

今も笑いをこらえているような……。私、へんかな?

「なんだか、いい友達になれそうな気がするわ。今年一年間、よろ
しくね」

「う、うん」

胸がほわつとなつた。「うん」って言つたけど、胸の中では「つ
つそー」くらい思つてる。

綺麗な笑顔……、でも、ダメダメ! これは違うよお姉ちゃん。
どうしよう、お姉ちゃん。いきなり友達できちやつたよ。
名前は、鶴来冴子さん。

ああ、早くお姉ちゃんに伝えたい!
これが高校……すごいところだね!
でも、安心してお姉ちゃん。浮氣はしないから。
だから、あとで一緒に弁当食べようね。

じめへ私は田舎へおひるひじました。ね、寝てなによ。

「とこりわけで、お友達……できちやつたみたいなの、お昼休み。教室に戻ってきたよ。やつとお姉ちゃんに、報告だよ。何事も、組織ではホウレンソウが大切とお姉ちゃんは言つてたし。姉妹は……ん……組織つていうのかな。」

「その言い方、なんか使うシチユ間違つてないか？」

お姉ちゃんが椅子の背もたれに肘をのせて、威厳たつぱりに座つている。

「えー。そうかなあ」

「『できちやつたみたいなの』……つて、新妻か！ 妻夫木か！」
どうして突つ込まれたのだろう？ でも、『できちやつたみたいなの』と私の真似をするお姉ちゃんかわいいなあ。

腰のラインが、いいんだよね。わかるかな。

「ところで、お姉ちゃん。そのお腹をさする手は何？」

「三ヶ月つてところかな」

鈍い私でもわかつちゃつたよ、そのジエスチヤー。……私との子？
「でも、できちやつたんだよ？ お姉ちゃん」友達がね、いきなりだよ？

「まあ、お姉ちゃんとこり存在は妹よりも先にじめるのかもしけないが」

まだ言つの！？

「最近の動向だと、『できちやつて』から、婚姻届を取りに行く男女が多いらしいわよ」

鶴来さん、大人っぽい発言で広げないで！？
恥ずかしいよ。

私の机の横に椅子を持つてきて座つていた鶴来さんが小さなあごに指を当てる。

鶴来さん、お姉ちゃんとも仲良くなつてくれそつだよ。

大人っぽくて、美人で、お姉ちゃんとはちょっと違つけど、しっかりもののさんのイメージかな。背は私たちよりも、少し高くて、スラッとしてるんだ。ウェーブのかかった腰くらいまである髪の毛に、きりりとした切れ長の瞳。怖い人なのかなとも思つたけど、そうじやなかつたみたい。

「『できちやつたの』という台詞のありがたみが半減つづ一か全壊だよな、そくなつちまつたり」

「クリスマス前にプレゼントの隠し場所を当ててしまつた時の残念感よりもひどいものね」

「だよなー。地上で爆発しちやつた三尺玉くらにかもしだれないぞ」

「ふふふつ」「はははつ」

え、二人だけで笑わないでよ。どこで笑えばよかつたの?

なんだかこの二人、仲良くなりそうです。

どうしよう、このまま鶴来さんがお姉ちゃんのこと好きになっちゃつたら。

「まじかもそう思つたか?」

「え、ええと……、うん、そう思つよ」

なんとか私も話題についていかなきや。大人の階段だつてのぼつてみせます。

にしても、どうしよう。んー。

あ! そうだ。

「お、お昼だしさ、お弁当食べよう? 私、今朝作つてきたんですよ。鶴来さんも食べます? たくさんあるから、三人で食べてもじゅうぶんだと思うんですけど」

私はそれ言いながら、重箱（四段重ね）を「うんしょ」と机の上に置く。

ズシイつとくる重さは、本物だね。

この重さは私の愛だよ。愛なのだよ。愛の結晶なのだよ。大人にはわからない愛! なんちやつて。このお弁当はね、登校日初日、入学式、様々なイベントに華を添える、

まどかスペシャル まんぷく弁当 四段腹！

です。

お弁当箱のイラスト、お相撲さんなんだよね。えへへ。アマゾンで買ったよ。

むつかしい話はやつぱりお姫ちゃんの専売特許だから あまい会話に入れないかもしれないけど、鶴来さんとも仲良くなりたいけど でもライバルだけどでも今日はお腹も空いたし……、青空の下とは いかないけど、友達とかね、みんなで食べたら美味しいんだから。

ガラガラ。

扉が開く音で、教室がトーンダウン。

え？ え？ あれ？ あれあれ？ ほお、私、落ち着いてみます。

「おきぎゅうれぬよ！」して、下駄箱のところまで来ちゃったよ。

「そんなに落ち込むなよ。まじか」

「だつて……。だつてさ……」

「さすがに凹むよ……。

「お姉ちゃん、まさか入学式だけで今日は終わりだと思わなかつたんだよお」

「ちょっとだけ、腕を振つて抵抗してみる。

「案内には書いてあつたわね」

「え、そつなの？ 穴が空くくらい読み返したのに……。

「たまきちゃんは知らなかつたの？」

「いんや、知つてた」

「え、知つてたの？ つて当たり前だよね、お姉ちゃん、何でも知つていいし。

「……どうして教えてあげなかつたの」

「まじかも知つていいと思つてたんだよ～」

「お弁当一緒に作つてたんでしょう？」

「いやー、ウチは寝てたからなあ。家を出る時、入学式だけの割には荷物多いなあとは思つたけどね。まじかはいつも荷物多いかんなあ。はは」

「うう。みんなで食べたいなあ。お姉ちゃんもどうとなく寂しそうに笑つてるし。

「たまき……お姉ちゃんは、ちょっとだけ、アタシの知り合いでにじょと似てこる……ちょっと」

「ん……冴子、なんか言つたか？」

「ううん、何でもないわ。意識すると、アイツは現れるのだから。

……鎮まれアタシの右腕

鶴来さんがなんか怖いです。手からエメラルド色光が……、錯覚？

でも、お弁当、学校で食べたいな。

「お姉ちゃん。鶴来さん。学校にこつそり残つて、食べていへ」と、
できないかなあ」

上履きのまま、玄関先で体育座りをする私。
「わがままな妹を持つと苦労するなあ」

「ごめんね、お姉ちゃん。

「せつからだからアタシも是非とこいじりなのだけじ、んー、た
しか閉門時間があつたわよね?」

鶴来さんは鞄を肩にかけ直しながら、門の方を確認する。
もうあまり生徒もいないし、やっぱりみんな帰つたのかな?

「いんや、あるにはあるが、実は今日から上級生は部活がある」

「あら、じゃあ残つても平気なのね」

「やつこいじり」と。でもこいつの本堂は鍵がかかるから、部室棟にい
かないと締め出しをくらうだらうな」

私立菖蒲ヶ丘女子高等学校はね、本堂と部室棟と複合体育館と陸
上トラック付きグラウンドと野球場と……ええと、あとなにがある
んだっけ? とにかくとても広いんだよ。

「それで生徒数が少ないのね。部室棟つて、旧校舎よね」

「そうそう。まあ、結構校則キビシイからなあ、ウチは。……問題
はどうで食べるか」

後頭部をぽりぽりかいて、なにやら考えるお姉ちゃん。

そして、少しだけ沈黙した後、お姉ちゃんは腰に手を当て、胸を
張つた。

お姉ちゃんは自信満々に叫ぶ。

「お姉ちゃんパワーーーー!」

「……よくこんなところの扉をつけたわね。上級生でもこの扉が開いてたこと、知らないんじゃないのかしら？」

「開いてたんじゃない。開けたんだ」

「え」

「このお姉ちゃんパワースーツの一つ、針金くん一號でな」と、お姉ちゃんは手の中の針金をもてあそぶ。「ピッキングじゃないのよ。ていうか、いつ鍵穴を開けたのかわからなかつたわ……」

鶴来さんがふわふわの髪の毛を揺らしながら、驚いている。私だつて驚いてるよ、お姉ちゃん。

本当にお姉ちゃんはす「」いなあ。

ほんと、どうやつたの？ 不思議だなあ。

「ここのならお弁当広げても何も問題ないだろ。むしろお弁当を広げるべき場所だ」

鼻を鳴らすお姉ちゃん、かつこいによー！ 世界一だね！

「なぜならここは田校舎の家庭科室。家庭科室は料理をするところは食べるところ。食べるところはウチらの国十ヶ。相場はそう決まつてこる！…」

「……乱暴な二段論法ね。でもまあ……」

最後に這入つてきた鶴来さんは家庭科室の扉を閉めた。ちよつとほこつぽいかな、ここ。

「お姉ちゃん、でも、バレたら怒られないかな？」

「私はついつい不安を口にしてしまつた。

「確かに、お姉ちゃんの眞つとおり、使用禁止の可能性もあるわね。まだ火器類は使用できるみたいだし、しゅぼつと鶴来さんはコンロの火をつけた。

鶴来さん、危ないよ？ 意外と手が早いのかな。

「誰かここで遊んでいないか見回りがくることがあるんじゃないのかしら？ あら、水も出るのね」

「ああ、鶴来さん、そんなにいじつたらダメですよお」

「ちつちつちつ。……まどかに冴子よ。誰も使っていないからこそ、安全なんだよ」

あらあらついつい、という鶴来さんを遮るよつて、お姉ちゃんは指でメトロホーム。すると、鶴来さんは、

「というの？」

「これを見たまえ」

一ヤリと笑い、メトロホームをしていた指先で、大判の机の表面をぬぐつ。

「ふむ。予想通り。ずいぶん清掃に這入つていないうつだな。四ヶ月分の埃だ」

「なんでそんなことがわかるのかしら？」

「ウチが掃除しない人間だからさ。簡単な推理だよ。経験則に基づく推理だよ。灰色の脳細胞を使つ」ともない

「自慢するよつて言つたわね」

「むむつ」

「お姉ちゃんの指先、灰色だね！」

あいた！

ズビシッと指でチョップされちゃつたよ。

「つう。今鶴来さんに向けられたチョップが私に軌道修正された気がするんだけど、違うのかな。

「年末の大掃除が最後か……。それにこの学校に調理器具を使つような部活はない。昨年度の冬休み明けも、春休みも、だれもここを訪れちゃいないのさ。これを安全と言わざになんと言おつ……。」

「あ、あんぜん……？」

頭の埃を落としながら私は聞き返す。

「……とは言えないような気もするのだけれど」

「まあまあ、そんなこと言つてないで、とりあえずお弁当広げるた

めに少しだけ掃除しようぜ。ほり、おじかは清潔なぞつまん探して
くる！ 泳子はちりとつとほりまきな！」

「わかつたよ！ お姉ちゃん！ お腹空いたもんね！」

善は急げ、だつて。はやくここの食べちゃえ、大丈夫だよね。

「たまき……ちやんは？」

怪訝な顔をする鶴来さん。

「お腹を空かせて待つとする。立派だろ？」

うん！ お姉ちゃんらしくて、かわいいよ！ 私お姉ちゃんのためにお掃除がんばるね。

「…………むれあ…………」

「あれ？ 鶴来さん？ 大丈夫ですか？」

「…………鎮まれ…………鎮まれ…………シズマレ…………」

髪の毛がふわふわと逆立つて、また右手が…………ひーん、鶴
来さんが！

「大丈夫、」めんなさい、なんだか昔を思い出してしまつて
しゅぼん、と鶴来さんから変なオーラが消える。

「ほひ、いい思い出か？」

「なわけないじゃないのよ！」

掃除、さつと済ませるわよ！ と鶴来さんがなにやらやる気を
出したみたい。

これならすぐに弁当を広げられそうだよ。

ありがとう、お姉ちゃん。鶴来さん。

私のわがままに付き合ってくれて。

「「」れ、おこし、わ……」

「だるー？ 血饅の妹だからなあ」

へへへ。

お姉ちゃんも、鶴来さんも、一人とも私のお弁当食べて笑顔になつてゐる。

家庭科室の片付けはすぐに終わつた。

私はお掃除も好きだから、あつとこいつ間に終わらせて、ランチタイムです。

今日のお弁当は、まず一番下は、おにぎりだよ。中身は、鮭、梅、シーチキンマニア。

二段目はサンドウイッチ。タマゴ、ハム。

三段目はお野菜中心の和食総菜詰め合せわせ。

四段目はね、えへへ。

「けれどもして最上段にアスパラベーコン炒めがぎりしつ詰まつているのかしら？」

「えへへ。お姉ちゃんの大好物だからですよ」

一番上にお姉ちゃんの好物でいっぱいにするのは、私の特技なんです！

「でも多すぎるんじゃない……」

「おかわり」

あ、お姉ちゃんだ。

「はい」

「オカワリッ！」

「はいっ」

「OKAWARI（めつわや良い声で）」

「わいわいといえつ」

「……何ぞのわん」スタイル……つてアタシまだ食べてないわ！」

あら~り、もうアスパラベーコン炒めがなくなってしまった。
お姉ちゃん美味しそうに食べててくれて、嬉しいなあ。私それだけで
お腹いっぱいだよ。

「お、冴子も食べたかったのか。まあしかしまじかの料理を振る舞
つてもらえただけありがたいと思つんだな」

「いえ、まあ、そうなんだけど……感謝もしているのだけれど。で
もなんでたまきちゃんがこんなに偉そなのかしら……こほん。ま
どかちゃん、ありがとう、同じクラスになれてよかつたわ」

かわいい笑顔だなあ。

笑わないと、きりりとしたちょっと強面になるのに、笑うといん
なにふわふわするんだ。

私は鶴来さんの紙皿にサンドウイッチを取り分けて。

「私も入学式の時、鶴来さんが隣でよかつたです。……でもなんで
あんなに笑われたのかな?」

「まどか、冴子と友達になれてよかつたじゃないか。あれは良いボ
ケだつた」

そつかよかつたんだね、お姉ちゃん。それで鶴来さんと友達にな
れたんだよね。

「まどかちゃん」

「なんですか？ 鶴来さん？」

「そう、それよ」

ビシイリとひとをし指を反らしてクールにウインク。

「へ？」

鶴来さんの表情がきりりとなつた。

「友達になつたんだから、敬語はちよつと違和感があるわ。同級生
なのだし」

「変ですか？」

「変よ。だからこれからは冴子つて呼んでほしいし、敬語もダメ」

「そうだな。ウチはもう冴子のことを冴子と呼んでるからな」

おにぎりを両手に持つてお姉ちゃんはもぎもぐしながら言つ。か

わいいよ！

「……たまきちちゃんには敬語を使って欲しくなるのはなぜかしら
ちまちまとリスみたいにサンデーウィッシュを食べるつむ……冴子ち
ゃんかわいい。や。

日暮れにさしかかる。

「でもでも、そうだね、つぬ……透子ちゃん、がんばるよー。ぶい

涼子ちゃんはとても素敵な人。

友達になれてよかったです。

ね?
お姉ちゃん。あ、ご飯粒ついているよ。

私はひよこが、餉粒をあ茆あわんの口元からひいと上げる。

બાબુનાના

「おつかれ？」

こ、これはあれだよ、食べ物粗末にしたらいけませんつていうア

レだよ。

なんか汚かいでしるしやないか
熱であるんしやないのか?」

°T_N

お、おお、おでことおでこでガールミーツガール……………！

「つこでこわいのこいつは、元氣で、『あいつは』

「指す、
すす、
す」

吸われたああああ！

私は顔から火が出そうになつて、がばっと体を反らす。

「あら、市販の風邪薬なら持ち歩いているけれど、使う？」

さ、冴子ちゃん……や、やさしいいい！

「ななななんでもないです大丈夫ですう！ マイラブイズフォーワバー！」

「……本当に大丈夫なの？ まどかちゃん時々様子が変よ？ 朝から風邪気味だつたんじゃ？」

わわわ私がお姉ちゃんのこと好きなのはれちゃう！

冴子ちゃんって勘が鋭いの？

「ああ、まどかのやつ、いつも」「んな感じだぞ？」

「そそそそうだよ、冴子ちゃん、まどかのやつ、」「これが正

常だぞ！」

「……そ、そうなの」

なんとか「まかせたよ。ふう。

「しかしこうやって並んでいると」」」を見ていると本当にそつくりね。性格はまるで違うから表情が違つて見分け付くけど、黙つたられたらわからないわ」

「まあ双子だからなー」

お姉ちゃんが私から離れて、再びおにぎりに手を伸ばす。ちよつと残念。もう少しだけ……。

「美人な方がお姉ちゃんだよ？」

「外見は同じに見えるわよ」

「そつかなあ」

すると、お姉ちゃんがもぐもぐしながら。

「まあ、一つだけ違うのはほくろの位置だなうん。そうそう、私は唇の右下。お姉ちゃんは唇の左下にほくろがあるんだよね。

「あら、よくよく見れば

「ちなみにウチの誕生日は6月11日午後11時50分。チエジウ
と一緒にだ」

「あ、私は6月12日午前0時10分。松井秀喜と一緒にだよー。」

「え、ああ、うん。そうなのね」

あれ、鉄板のネタが……。

と、そのとき、家庭科室の扉がガラガラと開いたのだった。

「食べ物の匂いがしますわ……」

家庭科室に転がるように這入ってきたのは、着物を着た小さな金髪ツインテールの女の子でした。というか、あれ……なにゆえ前転？ しかも伸身……。これではあの大物女優のようです。

「こん、シユタツ！ ど。

私の目に金色の房がふたつ飛び込んできて。

「この子小さ～！ かわいい～」

「おお、活きのいい伸身前方回転だな」

お姉ちゃん冷静だよ！ 私も人のこと言えないかもですが……。

「そんな感心しないで……っ！ あ、あの、これは……すぐに片付けますから……！」

どうしましょ～、茶道部？ 日本舞踊部？ の先輩かな？ なで

しへんかな？

「こんなところで内緒で」飯食べてたなんて、入学早々怒られちゃう！

なのに、なんで冴子ちゃんはしぐとしてるの？ お姉ちゃん笑つていいのー？

悪いことはやつぱりしちゃダメだつたんだよ！

「やはり！ 食べ物に混じったさえぴょんの残り香！ 見つけたのですわ！ 鶴来冴子！」

外国人みたいな子なのに、背景に富士山が見えるよ……！ てか、今……。

「え、え、え？ どういづ！」とー？

冴子ちゃんと知り合い？

同級生？

「あー、面倒なやつが……」

冴子ちゃんの周りがどんよりしている。今まであったきりり感が

まるでないよ！

「部活の見学会を抜け出して正解でしたわ！」

「わつはつはつはつは、なんかよくわかんねえけどおもしれえー」

「お、お姉ちゃん！」

「なんかすこことになつてきちゃつたよ。

「ええぴょん！ どうしてわたくしと同じクラスになれたというのに一言も声をかけてくださらぬのー？ わたくしとあなたは旧知の仲！ 前世で交わした契りの元に今ここにこうして懇ろな関係になれる舞台は整つたというのにー……はつ！ ふふん、さてはわたくしの胸に飛び込んでくるのが恥ずかしいのですわね！ でももう大丈夫ですわ！ この道音新菜が全身で受け止めてあげますわ！ さあ！」

振り袖をがばつと広げて、小さな女の子……道音一一ナさん？ ハーフかな？ フランス人形みたいな子が上品にポーズを決める。もう手乗りサイズくらい小さくてかわゆいよおおお！ ……はつ！？

「えつと、し、知り合い？」

旧知の仲ということは、幼馴染みかな？

「ま、まあそんな感じかしら。本当は知らないと言いたいくらいなのだけれど」

冴子ちゃんのまわりだけ、局所的豪雨が……！ これがゲリラ豪雨……？ 冴子ちゃん、泣いているの？ 背中で泣くなんて、初めて見たよ。何がこの一人の間にあつたのかな？ 激しい恋かな？ ……まあ、あまり、というか、かなり嬉しくなさそうなんだけど。二人の温度差がすごいよ。

「さあ飛び込んで來るのですわー！ わたくしのナキウサギちゃんー！」

「マイハイーみたいに言つな！」

「そんなことは言つてませんわー！ 自ら自動変換できるなんて、やはりわたくしとええぴょんは相思相愛なのですわね！ 確信しましたわ！ 赤目のチビ子ちゃん！」

「チビはアンタじゃないの！」

「アナタも昔はわたくしよりもチビちゃんでしたわ」「へえ、汎子ちゃんって小さかったんだあ……。

ところで、そそそそそそそしそうあい？

つてどう漢字だつたつけ？

「まぢか、そうしそうあいは、相思相愛と書くんだ。お互に愛し合つてゐる様子を表す四字熟語だ。いしし」

「愛し合つてゐるの！？」

「なわけないでしょう！　ただの腐れ縁よ！」

汎子ちゃん……恥ずかしがる汎子ちゃんの気持ち、わかるよ。私もお姉ちゃんのこと好きだもん。

「そんな田で見ないで！」

きりきりきり。

「何を期待してこるのよ！」

道音一ーナさんがなにやら感慨深そうに首肯して。

「やうなのすわ。えびょんはそれはそれは昔は雪兎のようこ小さくてかわいかったのですわ。わたくしがいないと、寂しいだけで、毎晩毎晩大泣きして」

「嘘を織り交ぜるな！　アタシが背が低かったのは昔だけでしょう！？　今はアンタの方が極小じやないのよ！　このグラジル水着！」

「ブ……つ！　何て破廉恥な！」

話の腰の骨が軋む音が聞こえるよ。これは持ちこたえて見せなきや！

私はすかさず。

「いいの、えつと……、ブラジルさん続けてください」

「ブ……つ！　わたくしは道音新菜ですわ！」

「あ、こめんなさい。おもわず勢いで。なので、よければエピソードの続きを聞かせて欲しいです」

「まぢかちゃんがどつちの味方かわからない！…」

「めんね汎子ちゃん。でも、これはサガなの。」

「私にその「ラジリアンエピソード」をください！」

「……ふ、ふふん」露骨に眉間にしわを寄せたブラジルさんもつい二一ナさんは。

「大泣きするたびにわたくしはさえぴょんを抱き寄せて軋むベッドに優しく押し倒し、微熱を帯びた耳元に『灯りは消しませんわ。顔が見えた方が安心するでしょう?』と囁いていたのですわ」

「ほわわ……っ！」

「大人だよ！ 大入り袋だよ！」

「嘘で塗り固めるんじゃないわよお！ んなことあるわけないでしょう！」

「ほわ？ ちがうの？」

「つーか、まどか、何をそんなに大興奮しているんだ？」

「お、お姉ちゃん！？ ななな何でもないよつー！」

「そつか」

「……はう。人様のエピソードで我を見失つっていました。お姉ちゃんごめんなさい。」

するとお姉ちゃんが得意満面の道音二一ナさんをまじまじと眺めて。

「道音新菜、道音新菜……、お前、同じクラスじゃないか」「へ？」

「私、全然クラスメイト覚えていなかつたから、わからなかつたよ。

「て」とは、冴子ちゃんとも、私とも同じクラスなんだね」

「あれ、道音二一ナさんの様子がおかしいよ？」

「ド、ドッペルゲンガー……」

「何を失礼なことを言つているのよ。梅園姉妹じゃないのよ。アンタもクラスメイトでしょう?」

「……は、あ、……ふふん。双子のですわね。わたくしは一日中さえぴょんしか見ていなかつたから覚える暇はありませんでしたの」「キモチワル」

「……あなたたちはここで何をしていましたの？」

「自然の摂理みたいにスルーするのよね、アンタって。アンタの存在が特殊相対性理論みたいなのに。腹立つわ」

「うーん。冴子ちゃんはブリ……道音二ーナさんのこと、苦手なんか? でも、それ以上に仲よれそうだなあ。私にはそういう見えるよ。『ランチタイムだ』とお姉ちゃん。不出来な妹の作った弁当だが、食べていくか? クラスマイトだしな

「いや、たまー……ちちゃんが言えることじやない気がするのだけれど」

「お、お腹なんか空いてないのですわ」

そのわりには私のお弁当に興味がありそうな。

気がつけば、帶みたいなもので、背中をばつてんにしている。

真っ白な腕がのぞいて、スタンバイつてところかな?

「不束ながら精一杯作つたんだ。おかげもまだあるし、一緒に食べよう? ブラ……二ーナさんでいいのかな?」

さつや、冴子ちゃんから友達に接する時の注意点を学んだし、実践だよ。

「そう言つてわたくしを引き込んで、校則違反をつやせむとする気ですわね! ?」

「お、お腹空いてない?」

「わははは、バレたか」

「むしろコターンしなさいよ。帰りなさいよ」

三者三様です。けれど、二ーナさんの答えはすぐわかりました。

ぐつ。

「た、食べてやつてもいいですわ! 取り皿をよこしなさい……や、その前に喋りすぎて疲れちゃつたから、自販機でお茶を買つてしますわ! あ、その卵焼き! わたくしが戻つてくる前に食べたら怒りますわよ! いいですわね!」

そして、パタパタと小さな体を走らせて、廊下へ出て行つてしま

いました。

「むしろそのまま事故りなさいよ。戻つてこなべていわよ
な、何がそんなに冴子ちゃんを拒絶させてこられるの？」

「わからなかつたかしら？」

頬がちょっとこけた冴子ちゃんが「うう」と笑みをみせる。

「ウチはなんとなくな」

「そんなたまきちゃんと似てるとか思つたアタシが悪かったのよ

「え、なんか言つたか？」

「いいえ、何も。……アタシも、あえて新校舎でお茶を買つてくる

わ

「おひ、ならウチはリンゴジースな」

「お姉ちゃんリンゴジース好きだもんね」

「やつぱり似てるわ……」

友達がまた増えたのかな？ 私のこのドキドキは、樂しこつてこ
となんだよね！

お姉ちゃん、高校つて遠足以上に樂しくなりそうだね！

幕間　おまけ1

おまけ

春の日差しがぽつかりついた陽だまりの中。

新校舎のとある外付け自販機前にて。

女子サッカー部やソフトボール部のかけ声が響き渡る。

冴子「げ、なんでアンタが！」お茶買ってるのよ（裏を読みすぎたわね）」

新菜「さつき買つてくるって言いましたわ（ふ、一人きり……）」

冴子「そうだったわね……ねえ、二ーナ」

新菜「な、なんですか？」

冴子「なんかその、ええと。別にシカトしていたわけじゃないからね」

新菜「ええぴょん……、ふふん。そそそんなのわかつてますわ！」

冴子「記憶から消していたのよ」

新菜「……（一番上のお茶のボタンに手が届きませんわ！　着物のせいで腕もあがりませんし。ううー）」

冴子「（ポチッ）ほら、これでしょいへ～　二ーナつて玉露入りのこれ好きよね」

新菜「あ、あり、ありがと……（ええぴょん、また背が伸びたような気がしますわね。胸も……「うらやましい」……なんて！　ええぴょんのバーカバーカ！　ええぴょんのチビ！　わたくし先に戻りますわ！」

冴子「え……。あ、危ない……」

しかし着物で走りにくかつたのか。

ぱてつと転んだ二ーナを、冴子はしづらげほんやり眺めていた。

借り物なのに……と、新菜の涙声が聞こえたような気がした。

冴子「あ、リングピュースないのね……。たまきちゃんのはぎりり
オレンジ味でいいかしらね。ついでにまじかちゃんのも買つていつ
てあげましょか。…………お弁当、美味しかつたな……」

畠下がりの空は、いまだつぼみのままの桜の木に、ぬくもりを贈
つているように思えた。

ちょっとだけ頬に寒さを感じた冴子は、けれど、お腹はぽかぽか
だつた。

それはもしかしたら、お腹がいっぱいだからかもしれない。
それはもしかしたら、安心感なのかもしれない。

そそつかしい王子様……か。

冴子が思わず微笑んでしまつてこる」と、涙がつくのは、あと数
分先の話で、これはまた別のお話。

メガ盛りなお年頃

入学式から一週間。

だいぶ高校にも慣れてきました。

たまにね、放課後、あの旧校舎の家庭科室でお話してるんだ。こつそりお菓子の材料を持ち込んで、ここの間はクッキーを焼いたよ。お姉ちゃんの頬張る顔がかわいいの！

だから、とつても毎日が楽しいよ。

お姉ちゃんはいつもかわいいし、あとね、冴子ちゃんといーなさんはたまに仲悪くなるけど、幼馴染みの絆なのかな？ その距離感がちょっとだけうらやましい。

素敵なお友達ができる、私はしあわせものです。
でもちよつとだけ困ったことがあるのです。

「それじゃあ、このときの光源氏の心情はどうだい？ 梅園……たまき。わかるか？」

「先生、お姉ちゃんは私の前ですよ？」

今日はこれで三回目。

よくみんなに間違えられるの。

先生にまで。

「ううう。

……。

「そんなんに似ているかなあ

昼休み。お弁当を囲いながらいつも四人 お姉ちゃん、冴子ちゃん、いーなさん、私でおしゃべり時間。今日の重箱のイラストはだるまさんです。

「クリソツですわね

「ぐ、クリソツ？」

いーなさんの即答に、冴子ちゃんが首をかしげる。

「あら、さえぴょん、業界用語ですわ。知らないのかしらん?」「ああ……、その業界の伝統はもうバブルの泡とともにはじけて廃

れたと思つわ」

それからさえぴょんと呼ぶのはいい加減辞めて、と汎子ちゃんは卵焼きをぱくり。

「パステルカラーのカーティンガウンを肩にかけるスタイルとかな! あれ古典だよなあ」

お姉ちゃんはアスパラを頬張り、もぐもぐしながら。行儀悪いけど、でもかわいいなあ。

「そうね、でも噂によるとまだソニーのプロトヨーサーもいるとかいないとか言つわよね」

「見かけたら足あるか確認した方がいいぞ」

「……へつ?」と汎子ちゃん。「キャー」と私。

お姉ちゃんのジョークは面白いの。お化けなんかいるわけないのに。

あれ? 汎子ちゃん? 汎子ちゃんの顔が青いよ? それから右腕が発光……氣のせいかな?

「伝統芸能を軽視したらいけませんわ」

一ーナさんはびしやりと言つて、牛乳をじゅじゅじゅーっと飲んだ。

一ーナさんはこの間、琴を弾いてたらじーの。だから着物着てたんだつて。

結局部活は入らなかつたみたいなんだけど、そういう日本の伝統が好きなんだつて言つてたよ。

「しつかし、ほぐりだけじゃなんとかならないのか? クラス同じにしたのはあつち側なのによ。だからウチは辞めた方がいいって言つたんだ」

と、お姉ちゃん。え、そ、それつて。

「お姉ちゃん私と同じクラスじゃ嫌なの……」

「そんなわけないだろ? まどか、お姉ちゃんは同じクラスになれ

て嬉しいぞ」

ぱくつと箸を咥え、こゅうと手が私に向かって伸びてくる。

もひゅうじ。

ああ、お姉ちゃん。そこ気持ちここよお。

頭を撫でられるの、弱いの一。

「でも、見分けがつかないからって、間違えてこいつてこいつスタンスはよくないよなあ」

箸を咥えたままお姉ちゃんが頬を膨らませた。

私は、はつとし。

「どうしたらこいのかなあ?」「

「……髪型をえてみたらいいんじやないのかじりへ.

「あ、冴子ちゃん、わえてるー.」

さすが冴子ちゃん。お姉ちゃんと同じくじりこ物知りなんだよねー。

「こいつが言われると思つてたわ

「ほわ? なんのこと?..」

不思議なものを見る目で見られて、私はなんかうずうずしちゃう。

「そうですね。お一方とも髪型に個性がないのですわ。わたくし、ヘアゴムとかヘアピンとか、持つてきていますからちょっとこじりせて貰いますわよ」

「ウチはこいよ。めんどくわー」

机に肘をつき、力だるやうにすわるお姉ちゃん。かわいい。

「そうだよ。お姉ちゃんに面倒なことはさせたらダメだよ」

「じゃあまじかさんがあたくしの髪の毛ほどきを取るところのですわね」

「一ナつていらんなものじゃらじやら持つているわよね

冴子ちゃんの言つとおり、そういえば今もサンザシのヘアピンで前髪を分けているよね。

ツインに括つていいヘアゴムも、カラフルだ。

「一ナさんつてお洒落だね」

「当たり前ですわー。レティのたしなみですわー。まあ観念して跪

いていじられればいいのですわ
「二一ナ、それはなんか違うわ

私、どんな髪型になるのかな?
放課後にやつてみるとことになったよ。

放課後。

旧校舎家庭科室

「まじかさんつて髪の毛たるせらでいいですわね」

お姉ちゃんの方がもうとれりゃだよーやつ思ひでしょ?..

二〇一五年九月二日

「アーティストのアーティスト」のアーティスト。

「黒つで二つのもまた、童れますわ」

「……かわいいで、ロンドだもんね。かわいいのに

「モルモット」

私は一ノちゃんの髪の毛がうらやましいけど。

「隣の芝生は青いってことね」

「涼子ちゃんのスタイルもついでましこよー

え、そ、そんなふうに見つめないで

恥ずかしがる涼子ちゃんかわいい。肩を抱く」とおしゃれじもじ

したやうなんて

意外と...恥ずかしかりさん?

それでですね

めじしてすれ

ソノハシハシナシを逆にシナヤシナウ

「アーティストの個性」の問題

「？？？私は誰ですか？」

「え？」

私の田の前に樹立するよつた立

んの手前にある椅子に腰掛けたお姉ちゃんの髪の毛から手を離し、

私とお姉ちゃんを見比べる。

「一ナさんが今まで髪の毛をこじついていたのは、お姉ちゃんのだよ？」

「一ナ、お約束じくわい」

「わ、わ、わかつてやつていたことですか！」

「わはははははは」

お姉ちゃん大爆笑。私の隣で汎子ちゃんもくすくす笑つていて。お姉ちゃんがやりたかったことつてこれだったんだね。

「一ナさん、顔真っ赤っか。

「小さいからつて馬鹿にするんじやないですかーーー！」

私の髪の毛は今、ワツクスでモヒカンみたいにビビン！ とスカイタワーみたいになつてゐる。

「れは」」れで、お姉ちゃんが以『一』やつだなあ。

——ナさんが櫛で髪の毛を元通りにしながら。

「さえぴょんよりも癖がない直毛だからふんわりしないのですわ」

「へえ、涼子にもやつてあげたことがある言い方だな

תְּהִלָּה בְּרִיאָה וְבָרְאָה

一 御の御立候おる」

ビシ、と湯子ちゃんの右腕が「一九七六年の口もとに火葬する！」

九月の死傷者一覧

卷之三

「あ、ええとね、モード

け遊びでやつただけよ」

いつになく歯切れの悪い涼子ちゃん

もかもかニ！

「おまかせは絵を描けが人質のことはめいにはい息を吹ふと

アザミの主は、緑い水たまりが、水たまりの主は、アザミの主。

文部省圖書審定委員會

耳をふるわねーねー聞ひ逃げちやん。ビ、ビーフたのへ

「さえひよんはふわふわの髪の毛と同様！」
自分を盛つてるので

すね!

「うわ―――ん！だから二ーナと一緒にいたくないのよー！」
冴子ちゃんは田にもとまらぬ早さで扉まで移動すると、ガラガラ！
と扉を開け、ピシ！と閉め、家庭科室を飛び出してしまった。
「ま、まだ話は続きですのに！ ちょっと！ セえぴょん！？」
続けて二ーナさんも外へ飛び出してしまった。
ぱつりと私とお姉ちゃんが残されて……。
えへへ、一人きり。
じゃなくって！ ばかばか私。
「お姉ちゃん！ た、大変だよ！」
がばつと立ち上がったお姉ちゃんは、うんうんと背伸びして。
「あの一人にも色々あつたようだな」
「ど、どうしよう。せっかく仲良くなれたのに……」
「二ーナに悪気があるようには思えないしなあ」
「そうだね、仲が悪いだなんて思えないよ！」
私あの二人のこと、何も知らないけど、でも、こんな悲しいよ。
もつともつと知る前に、一人ともいなくなっちゃうなんて、いや
だよ。
するとお姉ちゃんが私のところまできて、頭をぽんぽんした。

「お姉ちゃんパワーだ」

「え？」

「手分けして探してみよう。まじかの高校でできた初めての友達が、
困つてんのだ」
「でも、どこにいるかわからないよ？」
あやめ高は、とても広いんだよ？ お姉ちゃん。
「大丈夫、お姉ちゃんはなんでも知っているだ」

メガ盛りなお年頃4

「はあ……っ！　はあ……っ！」

私はお姉ちゃんに言われたといつまでもやつてきた。

本堂横の自販機置き場。

ここは本堂の窓からも、旧校舎やその他の施設から死角になるところなんだ。

お姉ちゃんがそう言つてた。

お姉ちゃんは知つていたみたい。

知つていた。といつと昔から知つてゐるかのようだけど、そういうやないんだって。

気がついちゃつたと悪戯っぽい笑顔で言られて、私は察した。冴子ちゃんは昔の自分から脱却したくて、ここにこうしている。昔何があつたのかはやっぱり本人じゃないし幼馴染みじゃないからわからないけれど。

一ーナさんの言い方を鑑みると、昔の冴子ちゃんは背が低くて内気……。

今の雰囲気とはまるで真逆だよ。

その過去の自分が嫌だつたんぢやないかつて、お姉ちゃんは言つ。だから、過去を知つてゐる幼馴染みの一ーナさんが鬱陶しかつた。確かに。

過去を変えたければ、過去をなかつたことにして、知らない土地で知らない人たちと一から関係性を築き上げていけばいい。自分で思い描いた自分を演じて、自分自身を作り直せばいい。

そうだつたよね、お姉ちゃん。

でもね、それを聞いた上で、私は冴子ちゃんに会えてよかつたつて思つたんだよ。

「たまに、ここに来てたんだつてね。お姉ちゃんが教えてくれたよ。私は自販機の隙間でうずくまる冴子ちゃんの前に立つた。

「作り直すことなんか、できないよ」

顔をあげた冴子ちゃんの頬には、「うすら涙の跡かな……、悲しいサインがあった。

「過去を否定したら、冴子ちゃんは消えちゃう」

小さな頃からずつと歩いてきた道を封鎖しちゃつたら、それは自分自身を否定しちゃうことになるんだ。そしたら、今の自分は消えてしまう。なかつたことになつてしまつ。見えなくなつて、誰からも相手にされなくなつてしまう。

じゃあどうすればいいの。

「私、自分の言葉で何を伝えればいいかわからないよ、お姉ちゃん。お姉ちゃんみたいに、上手に喋ることなんか、できないよ。

強い心を持つて！ かな？

泣かないで！ かな？

わからないよ、お姉ちゃん。で、でも

「冴子ちゃんと友達になれて嬉しかつたよ。これで友達じゃなくなるなんて悲しいよ。四人でいられなくなるなんて悲しいよ」

「うう。目の奥が痛いよ。

「冴子ちゃんのこと……、過去に何があつたかはわからないけど、でも、毎日少しづつ冴子ちゃんのことを知ることができて、私とも嬉しかつた。今も胸の奥がズキズキするけど、でも、嬉しかつただから、一緒に悲しめるんだ。

悲しいから、嬉しいんだ。

冴子ちゃんの抱える悩みがわからなくても、でも、気持ちはこんなふうに繋がることができること。

もう、友達だから。

でもね。

気持ちだけ前に行つてしまつて。

なのに冴子ちゃんのことを知らない自分いる。

それがとても、悔しいよ。

「だから、悩みがあるなら教えて？ 私にできる限りながら、……お

弁当がんばつて作るよ？ お姉ちゃんの分と、あと一人の分！ みんな美味しそうに「」飯を食べる姿がみたいよう

こんなに、こんなに悲しいなんて。

ぬぐつても、ぬぐつても、冴子ちゃんの顔が滲んでしまつ。

「なあに、その頭……ふふつ」

「ほわ……？」

冴子ちゃんが笑つてる？

「ワックスのせいだハリネズミみたいになつているわね。ふふ、傑作じゃないの。盛りヘアーね」

「え、え？」

私は顔に血が上つてぐる」とがわかつた。

頭に手をやる。

ちくちくする。

髪の毛がもつしゃもつしゃ。つんつん。

う、うわああああなたにこれ、こんな頭で校内を走つてたの？ はずかしいはずかしいはずかしいはずかしい！ もう、お姉ちゃんのお嫁になれないよ！ どうしよう……うう。

「そんなわかりやすい頭してたら、まどかちゃんが来たつて、すぐ

にわかつちやつたぢやないの。もちろん、アタシはそのほくろがなくたつて、まどかちゃんを見分けることができるけどね」

「でもね、これはその気がつかつただけで、ええっとね、わーん

「アタシだつて友達だから」

「へ？」

友達だから。

そう冴子ちゃんははにかんでくれた。

幼さの残る笑顔で。

これが等身大なのかな？ きつとそうかな。

「まどかちゃん、何そんなに深刻な顔をしているの？ アタシはね、喉が渴いただけよ。久しぶりに炭酸を飲んだら、目こしみただけで、でも……。

「お見通しなのね。うまくいくと思つたのに……」

冴子ちゃんは立ち上がり、お尻を叩いた。

その仕草はやっぱり、大人っぽい。

「アタシは弱い自分を変えるためにわざわざ隣町のこの高校に来たの。ちょっと余計な荷物までついてきちゃつたけれど。でも、それもひつくるめてアタシなのよね。過去を否定するためにここにいるんじやないわ。だから安心して？……これで隠し事はもうないわ」

「また、四人で一緒に弁当食べられる？」

「当たり前じゃないのよ」

そう言つと、冴子ちゃんは一步私に距離を詰めて。

「期待はずれでごめんね。でも、こんな子でもよかつたら、また友達になつてほしいわ」

「……ええぴょん」

差し出された手を私は握りかえした。

私の友達の手。意外と小さくて細い手。まるでお姫様みたい。

私は目元をぬぐいながら、そう思つた。

「その言い方はダメよ」

「えへへ、ごめんね」

「ふふふ」

そそつかしい王子様にだけ、許してあげるんだから。

…… れじ。

語り部が変わるぞ。

ウチだ。スネークだ。

否、たまきだ。

あの子だけに任せていたら、やるやるなままだしな。
たまにはおねえちゃんパワーを使おう。

とはいえ。

ウチは鶴来冴子があれこでまつりとしてこむをみてしまつ
ただけなんだ。

あとはちょちょいと推理をして、道音新菜と鶴来冴子の様子を察
して、関係性を導き出しただけだ。

けれど、ウチがこいつらの輪の中に入つていつたら、まじかのよ
うに取り持つことなんかできなかつただう。

まじかだからできたんだ。

冴子が友達として自ら選んだまじかだからできたんだ。
まじかはさ、おつちよこじよこで世間知らずでマヌケでノロマだ
けれど、ウチの自慢の妹だ。

とても、思にやりのある子なんだ。

そこがウチとの違いさ。

「わたくしはさえぴょんが無理をしていふのを知つてゐるのですわ
本当、一一ナつて小さいな。一三〇くらいか?

「150ですか

「そんなんにあるか?」

「あるに決まっていますわ

「そうか。ああ、まあ、見ていてわかつたよ。冴子が無理をしてい
る」とくらこわ

一一ナも大概、大切な人の前で意地つ張りになるきらいがあるけ

れどな。

「コイツも、根っこがとてもお人好しなんだよな。

一週間でそれがわかるなんて、冴子も含めて、おまえら素直すぎるだろ。

しつかし一ーナを探すのに苦労したぞ。

……迷子になるなよ。学校で。

「さえぴょんはとても弱い子なのですわ」

「それは見えないぞ」

「それはわたくしがそばにいるからですわ！ 同じ高校を受けてよかつたのですわ！」

「……なるほどねえ」

「だからわたくしがそばにいてあげないと、あの子はひとりぼっちなのですわ。」

「おいおい、ひとりぼっちかよ？」

自販機の前へ親指を向ける。

まどかと冴子。お互泣きはらした顔をしてくるくせに、どこか晴れ晴れしたような顔をしてくるね。あが、ひとりぼっちに見えるか？ 一ーナ。

「あ……さえぴょん」

「過去に何があつたのかは知らないよ。ウチには価値のないものだ。けれど、おまえらの思い出は大切なものなんだう。だからその思い出がいつまでも壊れないように、大切にしたくなる気持ちもわかるぞ。でも、ウチらは成長する。成長しようとする。今日の自分よりも明日の自分を認めて欲しくて、ウチらは生きている」

「………… も、さえぴょん」

「今のおいツを見つめてやれよ。……好きなんだろ？」

少し乱暴な言い方だつたかもしけないが、ウチはまどかのようになにかを振る舞えるほど器量がない。ウチが生まれてくる時、そういうものを一切合切お腹の中に忘れたのかもしけないね。まどかが全部持つていてるから、ま、いいけれど。

「すすす好きなわけないじゃないのー。ですわー。」

「口調が変だぞ。じゃあなんなんだよ?」

「…………」のままじやれんとまどかさんがひつひつてしまつ…

それは……最優先で回避すべき」

「お、おい!」

手を振りながら一人の方へ走つていいく一ーナをウチは追いかけない。

距離が、近すぎたんだよ。

一ーナと冴子だけじゃあ、破綻してた。

お節介かもしれないなあ。

ま、ウチはお姉ちゃんなんだ。あまりでしゃばらない」としょひ。三人とも、素直でいい子だ。ちょっと単純な気もするけれど、そこがいいのかもな。

ウチもつづり出して、結局駆け足になつていた。

しかし、……まどかの髪の毛……何があつたんだ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8627z/>

梅園さん家のたまきとまどか

2011年12月31日18時49分発行